ひと明かり

地域とNGOの接点に

夜のとばりが下りた岡山市北の内のオフィス街のビルの会議室。「国際協力のために今何をすべきか」。ネクタイ姿のサラリーマンや勤め帰りのOLたちが、深夜まで白熱した議論を戦わせた。二十五日夜開かれた市民グループ「岡山国際協力機構」の定例会。岡山大医学部助手の山本秀樹医師(三九)＝写真＝は、事務局長を務めるアジア医師連絡協議会（AMDA）の難民救援プロジェクトを報告し、「国際協力のマンパワーは市民にこそある」と訴えた。

昨年六月からAMDAがネパール東部の難民キャンプで進めるブータン難民救援のプロジェクトリーダー。十二月には念願だった二十四時間体制の医療センターを開設、国連難民高等弁務官からも支援を取り付けた。

「難民ばかりでなく、地元の住民からも『日本人先生を頼って来ましたんで』と愛着をもたれているのが一番うれしい。地域に根付いた息の長い医療プロジェクトにしていくつもり」

難民の背景にはアジアの複雑な民族問題がある。難民は七万人を超えたが、ブータン政府が難民と認定せず、ネパール政府も世界に支援を呼びかけられない理由のひとつでもあるという。「難民と聞くと、何とも言えない感情がわく。台湾で暮らしていた我が家は、戦争という国家政策のうねりの中で国境が変わり、家や田畑を失った。そんな家庭で育ったことが、政治に翻弄（ほんろう）された難民たちのもとへと救援に出向く原動力なのかもしれない」

ネパールの無医村、ミャンマー難民キャンプと、救援活動は二年間で三カ月近くになる。「教官なんですが、大学ではたまにしか仕事をしないんだねって言われたりもする。だけど社会貢献してこそ医師。本当のことを言うと、まず国際協力をしたくて、それではどんな職業がいいか、と考えて医者になった」。だから選んだ専攻も社会医学といわれる公衆衛生学。

ブータン難民のように相手国から支援表明がない場合に政府は動くすべがない。そんな時こそ市民の出番だ、というのが持論。「衣食住と支援できることはいくつもある。そんな地域社会の力と経験豊富な非政府組織（NGO）の人材力の接着剤になる役割を、岡山国際協力機構でやっていきたい」

（長谷川　利幸）

この日・あの時